

日本史の表舞台に登場した最初の福井人

『日本書紀』によれば、子どもがいなかった第25代武烈天皇が亡くなると、後継者をどうするかが問題となった。そこで大和の有力豪族・大伴金村らは天皇の血筋を引く越前の男大迹王（のちの継体天皇）に白羽の矢を立てた。金村の要請を受けた男大迹王は、57歳にして中央へと歩みを進めることになる。

福井に残る伝説の数々

男大迹王は、近江の豪族・彦主人王と越前の豪族の娘・振媛の間に生まれた。幼少期に父を亡くした後、母の故郷である高向（現・坂井市丸岡町）に戻り、即位するまでの半世紀を過ごした。

越前における男大迹王の業績はいくつもの伝説となっている。中でも水害の絶えなかった越前平野の治水事業を進めたという治水伝説、越前漆器や笏谷石採掘の始祖であるという伝説はよく知られているところである。

これだけ多くの伝説、伝承が県内各地に今なお受け継がれているのは、それだけ彼の偉大な人物像が、福井の人々の心につかり刻み込まれてきた証といえるだろう。

足羽山山頂に立つ継体天皇像。明治16年、地元有志の石工らによって建立された



越前の有力豪族から日本のリーダーへ

大伴金村からの要請を受けた男大迹王は、河内の樟葉宮（現・大阪府枚方市）で即位した。継体天皇の誕生である。

57歳という高齢での即位。樟葉宮から遷都を繰り返して、大和に都を定めるまでに約20年を費

やしていること…。継体天皇をめぐる謎は多く、今も論議は尽きない。とはいえ、越前の有力豪族から日本のリーダーに昇りつめた背景には、当時の越前が強大な国力を有していたことに加えて、尾張や近江、大和の有力豪族などと姻戚関係を結び、強力な後ろ盾を得ていったことが

考えられる。こうして即位した継体天皇は、筑紫国造磐井の乱を平定したり、朝鮮半島について巧みな外交政策をとるなど国内外の問題に対処。その名の通り天皇家を「継」ぎ、大和王権の危機を見事に救ったのである。



越前市粟田部の『花筐公園』。男大迹王はこの周辺に一時暮らしていたと言われる。公園内には彼が即位のためにこの地を去る時、愛する照日の前への形見として残したものと伝わる『薄墨桜』や、皇子の産湯に使ったとされる『皇子ヶ池』などがある



『石塚神社』境内にまつられた巨岩『岩座』。男大迹王は、この岩の上から越前平野の治水を指示したという（坂井市春江町石塚）



大伴金村が遣わした大和王権の使者と男大迹王が会見した場所と伝えられる『天皇堂』（坂井市丸岡町女形谷）



振媛を祭神としてまつる『高向神社』。男大迹王が住んでいた高向の宮の中心地だったと伝えられている（坂井市丸岡町高田）

男大迹王が天皇に即位したと伝わる樟葉宮跡（大阪府枚方市交野神社境内）

